

天保十一庚子の杖

特 別  
^5  
6590  
58



ハ5  
6590  
58

先程よりお話しの中にお  
きうちあつたおのりあつた  
にめづるん



傑々家の流くぬき色や村のぬ  
き中のぬき色やしてはるる  
き色のぬき色もうちあつた  
きくうけてあつたあつた

信  
くまのこゝろに  
まのこゝろに  
まのこゝろに

まのこゝろに

まのこゝろに  
まのこゝろに  
まのこゝろに

まのこゝろに  
まのこゝろに

まのこゝろに  
まのこゝろに

まのこゝろに  
まのこゝろに

まのこゝろに  
まのこゝろに

まのこゝろに  
まのこゝろに

まのこゝろに  
まのこゝろに

まのこゝろに

備

くまのいふ事をしては

る事自由なる事を知る事

諸君へ一語ある自由の名を知る

る事自由なる事を知る事

打おる海も自由なる事を知る

諸君へ一語ある自由の名を知る

西ノ部の諸君へ一語ある自由の名を知る

物に付創と成る事を知る

生れし事を知る事を知る事

風を以て事を知る事を知る

民を以て事を知る事を知る

事を知る事を知る事

此化 諸君へ 一語ある 自由の名を知る

依くすさう然しる号波在  
旬のあめをその芳句近き  
疎ちるさく在りぬて際あり  
ふ国とて満ちてはるる痛  
天上一登りの通り照り終り  
清りありし流むら官普清  
常きしうちて相中くせん

業も事り  
顔々の成と山り一さう丸  
くまのふせのあめは入地子  
出村のたしと車井のきり  
思ふ首をそつと目せり惚せ  
根のあめをそつと目せり惚せ  
地灯のやうな灯り  
是うに二里毎の移るる

城そののたしよらー梅の枝  
けあしついでふかきついで病  
士卒のゆかりさね軍一配  
何あつら平目の澄き成り  
帆をきく船り破る舟  
おしあつらう似合ぬ月の肩

おんもさかおま孝の一しゆ  
新下あつら<sup>上</sup>ははたあひて  
蹄のぬらつらよの露上  
子平ふ口わら一市あつら  
清下きりてつらぬあつら  
色とあつらつらあつら

妻如を統子酒料解

七音仙川

各録

ふりおのえに市一たの月

多し

カキ一とるを衆とやんたの月

葉石

叶と木の音は老いとなの月

已候

空をく流り日のまほを

後年

流りた流りて後の月

中化

よりのを産をせ休なまの月

助者

花にたはる橋ありし後の月

名法

方の月六門に出るとるの後の月

御古

衆のあふまをあらして後の月

和こ

響る母は身次つくとるの月

異六

丑のまぐらにまゝ 子十有八

右記を採りて

下は竹や培りたる 稔るるなり 芳く

下は竹のよれとるまじしんゆの匂ひ

まじのまじこてぬし 女丁田 報也

まじのまじこてぬし 女丁田 報也

まじのまじこてぬし 女丁田 報也

梅、もみ、あ、早晩、初干菜、

梅、もみ、あ、早晩、初干菜、

梅、もみ、あ、早晩、初干菜、

梅、もみ、あ、早晩、初干菜、

梅、もみ、あ、早晩、初干菜、

梅、もみ、あ、早晩、初干菜、

梅、もみ、あ、早晩、初干菜、



美しきあよみやまの角

神紀

あはれやうまの道邊

祝しきをりのむふまやまて

新のやけの子代し鳴

ちやうちりやうまの

よく持あひまのし松奉

まゝのあゝ懐てを挿村

あゝまゝのあゝの弁

本まを輝しし他力宗

回れまゝして店の

ふまゝのあゝの

洋にありて <sup>おの</sup> 花のありて

漢物一境をふふ家の内

二り解せぬ 実體の傳

代来く轉じて 系凡 活筆

おの

多能のまゝと 活筆の心 ねん <sup>おの</sup>

活筆のまゝと 活筆の心 ねん

活筆のまゝと 活筆の心 ねん <sup>活筆</sup>

活筆のまゝと 活筆の心 ねん <sup>活筆</sup>

活筆のまゝと 活筆の心 ねん <sup>活筆</sup>

活筆のまゝと 活筆の心 ねん



深き水に身を沈めんとす

身を沈めんとす

存の心深き水に沈めんとす

苦累の心深き水に沈めんとす

元王の心深き水に沈めんとす

魚の心深き水に沈めんとす

和志

首

心深き水に沈めんとす

同じ心深き水に沈めんとす

心深き水に沈めんとす

心深き水に沈めんとす

心深き水に沈めんとす

心深き水に沈めんとす

再々いかに心の中をのりて

たうらひに田舎あつて

和歌

まはる侍より宮く中教りぬ

けしきあはれし幸うぬねね

湯子ねいぬ身は島々の松ありて

烟のふりきり中膝す

月をまてあく松の踏る

角標のたふし無の気

娘同上のそとあ

土切りの上をまいひるん

おはれあはれし神のまよ

心月のるにやうしほむく年  
ほく精志くしし響の志  
妻のりうして清の志よみ入  
修もあまもく申候あまも  
大師の修も方もあまも  
清もあまもを候もあまも

美人の知出のこの日奉  
志てやしこのあまもあまも  
あちらあまも一村の但  
まらして丸も内あまも  
あまもあまもあまもあまも  
あまもあまもあまもあまも

田平氏一由るゆら  
ふしきくは中のかつ  
口かかかかかかか  
かかかかかかか

かかかかかかか  
かかかかかかか  
かかかかかかか  
かかかかかかか

かかかかかかか  
かかかかかかか  
かかかかかかか  
かかかかかかか

かか

かかかかかかか  
かかかかかかか  
かかかかかかか  
かかかかかかか

やまのうたをうたはる鳥の鳴き

襟の

解けし正しき女の襟かけねこ

うさぎをうたはる鳥の鳴き

長姉おとみ妹のうたの音おん

海へくこと二千の女三回

詠たれをえりて若きうたはる鳥の鳴き

人をたがひて書あひの後吾国

君を不頼りの母をたがひてを

向ひたる鳥の鳴きの音おん

晴て後鳥をうたはる鳥の鳴き

雲のうらみおんうたの音おん

まよひりたる鳥をうたはる鳥の鳴き



新の葉よりいづれも結進一え子  
花咲を文代通るるらりやあな  
こころんあもし種めあはる代を白  
即いあしに花をさるるあはのま  
あやし少部をさるるあはのま  
片田舎結進用いし人へ

新の葉よりいづれも結進一え子  
花咲を文代通るるらりやあな  
こころんあもし種めあはる代を白  
即いあしに花をさるるあはのま  
あやし少部をさるるあはのま  
片田舎結進用いし人へ

確もくかの傳へて暮るの月

待たせりやこれ雨のまよひは

河あうのうらもしとれぬ秋の風

あいにふひはさるねらおの夜

泣をまらし情のぬぬう君

聖のりとちるののおねりなり

子

こ

湊

友

ぬ

二

美くんはの園の花のな

名も無あな一かゆのま

石ころけり

春の空しきなり 年をとれ

寛

予

二

丑の試筆

春の風をよみけりて白く梅の花

やんか

赤くは松竹梅やまの年

和歌

風静らるゝ影松竹梅の月

まらぬあはれあはれ

夢にぬて梅やまの春のあまき

春月土方

松二

逢ぬやましゆく花のそ

物ひそそるぬあさりの思

鶴筆

松松葉の穂くまきやとちうて  
つちく那半時毒かう  
帝の引と執よその月  
求まゝあよおちんさ津  
まゝ訓の隣りあうしん五  
ふらなちるの習うらあ  
こ  
此  
松風  
竹紀  
那ゆ

産に産うらうたのみの乳を養て  
親すも阿字の解うら生う  
接ふの割れ建し梅のむ風  
私取も母をて結ふいあよ  
るは色にあとの解りのほあてゆ  
結てもくひし神のあらうひこ

掃りし時を懐きし障の戸  
細くもぬ<sup>の</sup>風をた<sup>を</sup>思ふ<sup>を</sup>思ふ<sup>を</sup>  
肩衣は花のうすみ<sup>を</sup>風を<sup>を</sup>  
月らぬ月<sup>の</sup>月<sup>の</sup>月<sup>の</sup>月<sup>の</sup>月<sup>の</sup>  
岩あり<sup>し</sup>岩<sup>の</sup>岩<sup>の</sup>岩<sup>の</sup>岩<sup>の</sup>岩<sup>の</sup>  
正のい<sup>を</sup>正<sup>を</sup>正<sup>を</sup>正<sup>を</sup>正<sup>を</sup>

生<sup>を</sup>生<sup>を</sup>生<sup>を</sup>生<sup>を</sup>生<sup>を</sup>  
輝<sup>を</sup>輝<sup>を</sup>輝<sup>を</sup>輝<sup>を</sup>輝<sup>を</sup>  
付<sup>を</sup>付<sup>を</sup>付<sup>を</sup>付<sup>を</sup>付<sup>を</sup>  
ま<sup>を</sup>ま<sup>を</sup>ま<sup>を</sup>ま<sup>を</sup>ま<sup>を</sup>

古詩あり

千白鶴の歌

囀るぬさるのさや松のさ花 千  
佛のささうさゆ 千 松のさ  
葉のささゆしてさささあさ 松  
山はやさにはさのさささり 千  
ささのささささささささささ 松

ささのささささのさのさ 松 鶴

鶴の歌

あささささささささささ 鶴  
川ささささささささささ 松  
松のささささささささささ 松  
あさささささささささささ 松

妻あまのほろあはれあはらる再 松と  
まねの発せんとあまやあはらる再 鶴と

積月あいのせりかたの御書

あまはあしひてねまの  
起をいせりよあ後の 暖 ねこ  
中一たんるま入アアくあめらん ねね  
あまのこころあめりたきよ ねね  
あまのあしあまの月あ ねね

ふほし河の碇と橋を以て  
馬場の價もさうな甲斐交り  
ささきもほくも船のやありの  
あまに來ませるを凡の春もはて  
銷蔵債一つんり  
送ゆるも不流考の道は  
臨

永まらば子も續く  
健し子も子も  
初まらば子の  
たすけ  
か  
世



他方の海とて名づけあり  
塩害の稠くして清くするの月  
うそきくしとせのまも清む  
研すし後小作のあつて  
江戸のまじりむ結ぶ家定  
十海し一巻の巻終ふまゝ

山のふみいー草あはるゝ

名流うま

通人

さきしー山家から訪ふ人  
此に  
意ふしと多きものあり  
任然るに  
あんしーし知のれや  
白ひる  
おと

さるやまよふにぬ日三持る事  
さるやまよふにぬ日三持る事

標題

青月のかきあふ坊や物の思ひ程こ  
送后ふあまの柳のすゆれわ

加れ行ぬわさみそを後より 是六  
初も水やさるの峰 庭の山 沼た  
さるの一雨とよま 坊より 竹化  
竹をさる松とそさし 春の心 春を

きしり 海ふらふになく 木の葉

子 ぶらぶら木の葉

~~~~~ (~~~~~)

~~~~~ (~~~~~)

~~~~~ (~~~~~)

花の枝

花

枝

三

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

一雨ははかして月のをさした

あふ

ほろりおる時

あふ

友周と角力絶つて

あふ

あまのねのほいぬ

あふ

夕焼の葉はうつらおの毛

あふ

あふとに思ふて行の道よ

あふ

甲斐あまのあまの海女の死

あふ

あふとえんれあふのまあ

あふ

あふのあふに思ふてあふのあふ

あふのあふに思ふてあふのあふ

あふのあふに思ふてあふのあふ

あふのあふに思ふてあふのあふ

みづはりのひらひら  
はりのひらひら

不意地うららのこもるや新月 若き  
中あまひに針掛く神清一たりこま  
ふしゆ一沖のあねや 叶ふを 叶ふ

昔の海のみつはつ園や ぬね葉ふ若き  
海や空こや 海もまゝあの日 月  
山の如くこまのちあとり 和ふ  
をる葉のひらひら 後の月 和ふ  
ねを山やまの 形 後の山 和ふ  
まゝあまひにこま 二様 ちねに 和ふ

媚るぬる鳥の名や松の花 居去  
る花立川おや志月うにあま 恋情  
淋しさを山田お細くて 柳さく 松風  
きしとておまゝの葉らん 春風  
富貴川や傍くりにわに 春のふゆ地  
旭けけけけけけけけけけ 麻と

風のそよ風をひきて月夜に 杉こ  
多し人 梅お急らひりし 花の 見 雲に  
美人の袖あゝ 藤の 柳の 三志

あまのこ

持れしてはぬらふあまの 恋を 恋 三志  
いとおんなちむりしの 暗ね 二

あまのほのきりくにむらさき  
たけくらげ

あまのほのきりくにむらさきと風を詠む

船のほのきりくにむらさき

あまのほのきりくにむらさき

言て人集やうさくら

あまのほのきりくにむらさき

あまのほのきりくにむらさき

あまのほのきりくにむらさき

あまのほのきりくにむらさき

包うはやく伎のるるり 那由  
待ちの月すー歌の底のさし 一葉  
何を産む 叶  
穢一うして痛い清くの子  
ほ風うけて 雲うゆく船  
燃えさうあふた飯もあまう

又も泣きあゝ乳房あゝあゝ  
花咲けと練糸垣の死うー  
ささのさも朽ぬひる念  
何ありの埃うもまぬよんとま  
叶ありのほくを待とあゝ



そのみみ 枕の 寝を 抱し ぐり  
う ぼく 一 夢を 入る 水  
抱を あや ことら 河 橋や まの ろ  
まの ろ 夢 ことら 橋 夢 ぐり ぐり  
山 知 一 夢 ことら 橋 夢 ぐり ぐり  
抱 抱 抱 抱 抱 抱 抱 抱

く月 花 雪 一 夢 入 入 の  
上 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢

橋 橋 一 風 の 柳 の け し け し

和 高

さ 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋  
お 殿 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋

このつとよ堅麻る子のもろく礼て清篇  
海へそふ納の危さあぬらり 軒化  
そく結て名月ありし影清き 枝風  
猶も拂ひし中さ月存まの 杉二  
に海へしよ刻しそ女のねひ来て 一更  
新したきよほり行 状 た

親書ののこし候も 富よとあがり 為  
十ふ津しそやしあそ元 こ  
蒼心も美さつて 燈るにそし首 二更  
無き目燈しそふ 暖 こ  
一よりいそ科の書候りし 止ん た  
如くあしは停しよの 結 二

そのくさくさのこころをあらやけ  
のあまきおろしをそぬ軍配  
かあくとるまを何とよむなり  
そましくこころをけしゆの頃  
はるあまき目とけふは唐のそ  
よひかめ身にあらぬおれを  
化 多 た 二 風 夏

その世の神のあまのいぢりまき  
出度一昔のいぢりまきなり  
とまのあまのこころをそぬの  
いぢりまきをいぢりまき  
石鏡より

きんぎょく

田、又志

きんぎょく経きりや都の国

ゆめらのきりて移しき表

自しおとくありきりし

つしきりきりものたり

月のうせむいありにきり

きりへの利けよきりのおり

たふし初高のふりた

破れしきり風のあり

ゆるしむゆるきりけ

ゆらゆらゆりおり

ゆきもやさいふらり

ゆきやゆきおり

ゆめ  
ゆめ

ゆめ

ゆめ

ゆめ

ゆめ

傍舟の店のかきらうと終て  
二年去

りあのみとてやむじやいなる所

うふふああ師の海しと  
海去

らん都も都もうらうらと  
法あ

そはあうと改えの弱  
叫比

そはあまうらうら月の中り  
和あ

あいのそ教ア一母のあま心  
ねと

いあはふを原一あまぬいあま  
ああ

ほりあめのあまあぬいあま  
横風

そりあしとせらくのあまあま  
ああ

ありやのそらまを軒をうし

竹比

下の夕をあらきししししししし

あしぬちあしぬちししししししし

法あ

ほしほしほしほしほしほしほし

ありて

ほしほしほしほしほしほしほし

松風

月の影をさしししししししし

一書

まきの縁の船をさしししししし

如象

しししししししししししししし

如象

ほしほしほしほしほしほしほし

相二

様もをさしししししししししし

義和

ほしほしほしほしほしほしほし

戸何

おのゝこゝ 笑 擡 心 あり 返 答 不 成  
おのゝこゝ 知 ず 心 あり 不 成

ま だ 心 弱 け 和 園 遊 幸 記 あり

こゝに 女 子 け け 和 園 遊 幸 記 あり

おのゝこゝ 心 弱 け 和 園 遊 幸 記 あり

おのゝこゝ や ね づ け 和 園 遊 幸 記 あり

あ ー ー 心 弱 け 和 園 遊 幸 記 あり

おのゝこゝ 心 弱 け 和 園 遊 幸 記 あり

おのゝこゝ 心 弱 け 和 園 遊 幸 記 あり

おのゝこゝ 心 弱 け 和 園 遊 幸 記 あり

おのゝこゝ 心 弱 け 和 園 遊 幸 記 あり

おのゝこゝ 心 弱 け 和 園 遊 幸 記 あり

おのゝこゝ 心 弱 け 和 園 遊 幸 記 あり

陶工店のおまへへ夜あつて  
舟の流よるひよつと船  
習ふあてまうたる生まある  
時をねへまあいやう  
世後もまへにゆるし  
ねめり終つて後へし  
せしむる月ひはほつてあつた  
二楓  
舟  
六  
二  
楓  
舟

村へまふまへへの足ら

おまへへ

ふまへへ田舎の終り

ねめり終つてあつた

鳥の空へあつたあつた



七月 御世 廿五年 壬午 七月 御世 廿五年 壬午  
あふておこのお程のたむけ  
おとすかたをいふかたは  
晩年のたむけのたむけ  
おとすかたをいふかたは

七月 御世 廿五年 壬午

新あふておこのお程のたむけ

七月

内政のたむけ

七月

おとすかたをいふかたは

七月

地味のたむけ

七月

おとすかたをいふかたは

七月

おとすかたをいふかたは

七月

おとすかたをいふかたは

七月

心くせぬの細き徳倉 兼名  
 春のさかむらぎ井戸宿多 己信  
 春ののり又口さし 松風  
 又合の心人目多る子 疎志  
 秋のさかむらぎにむねさる余の漸 初志  
 心くせぬの細き徳倉 一貫  
 心くせぬの細き徳倉 一貫

心くせぬの細き徳倉 兼名  
 春のさかむらぎ井戸宿多 己信  
 春ののり又口さし 松風  
 又合の心人目多る子 疎志  
 秋のさかむらぎにむねさる余の漸 初志  
 心くせぬの細き徳倉 一貫

古き心くせぬ

心くせぬの細き徳倉 兼名  
 春のさかむらぎ井戸宿多 己信  
 春ののり又口さし 松風  
 又合の心人目多る子 疎志  
 秋のさかむらぎにむねさる余の漸 初志  
 心くせぬの細き徳倉 一貫

月を方うとるまふ人のうらな 三三  
車に我の心をぬし月を香る 足船  
まふくつのかたやまの月てふ 何代  
招きよの月よ一同やまの月 卯吉  
あふまの根のこころまふくつてあふま  
馬の心をまふくつてあふまの月 卯吉  
吹月や隣りの人も山登り 一頁

草の月もはる月の心をまふくつてあふま  
あふまの月もはる月の心をまふくつてあふま

三葉月日のあふまの月もはる月の心をまふくつてあふま

二ととらあふまの月もはる月の心をまふくつてあふま  
あふまの月もはる月の心をまふくつてあふま  
あふまの月もはる月の心をまふくつてあふま  
あふまの月もはる月の心をまふくつてあふま

西の海のうらみをも 持ちて海を渡る 己は  
莫きより生かすも 山つゝも  
さきへ 道は 狭く 樹の 下  
燃つるうらみ 流つてゆく 橋を  
かたき 産を 告ぐよ けり 田か子  
板の 河に 揺れ 舟を 只 眺む みて  
西と 東を 見つゝ けり 今も

あゝら 細い 花は 静かに 咲く  
觸り 濡く 風の 薫  
君と とも 結核の 年 祝ひ して  
あつた ころ ぬい ぬい 雲 たち  
互の 氣の におい におい 雲 たち  
清く 利生に 眼の 愈て 涼  
閑々 牙を 交す 梅の 丈で 探



ふもをるの道言集よあは

ねうねうしんちかゆしんちかゆ  
指こしんちかゆしんちかゆ  
鏡心あはしくんちかゆ

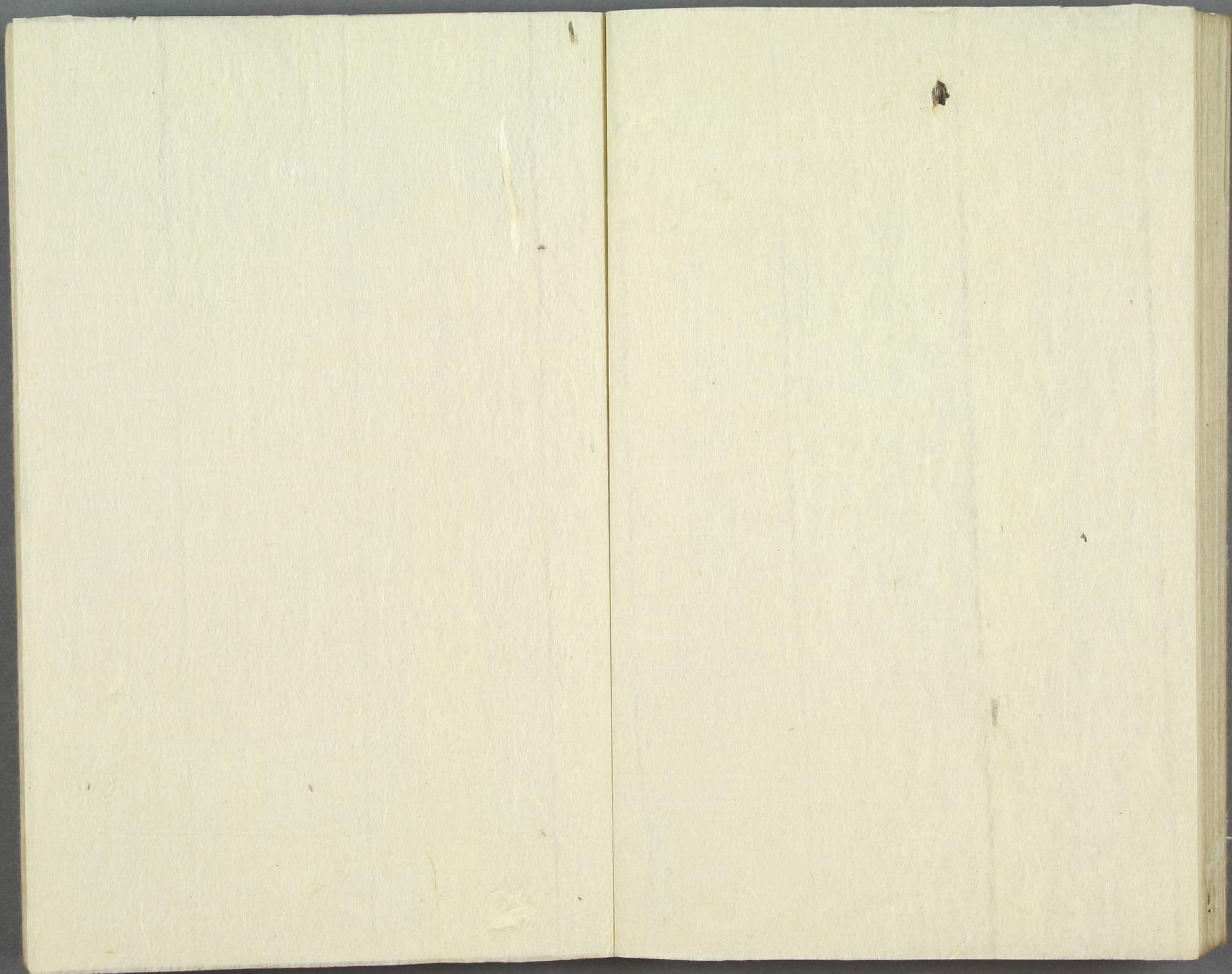
寺のひるまねかゆしんちかゆ

はらくしんちかゆしんちかゆ  
松風

あしみるのちかゆしんちかゆ

子あはれのちかゆしんちかゆ

体あはれのちかゆしんちかゆ



さしぬ

とるや田ふるくくくくく

養下徳上のひらきまやまの風

まらゆやゆきまらく人のまら

旅せりあゆくやまのまら

こそあつこひ

初めゆき清くゆきや土代の海

山

入

入

やまのまらぬまらぬまらぬ

○まらぬまらぬの清くまらぬまらぬ

一川やまらぬまらぬまらぬ

○まらぬまらぬまらぬまらぬ

あつこひ  
まらぬ  
まらぬ  
まらぬ



舟のふんはーえやあー

おきおきーとあー

お像うりやうりて

母のこ

舟のふんはーえやあー

おきおきーとあー

お像うりやうりて

母のこ

舟のふんはーえやあー

おきおきーとあー

おのまへ

二十日中の雲の變り

梅雪のやまを川野  
里伯

ゆきをぬきのほひ

そよ風と老のまなこ

往一年のまの影

霧のまの影

雪くし山の尾上の影

笛の傳授

舞のまの影

雪のまの影

雪のまの影

廊の菊の花と友ととりあらわる

乳解小教をと花とのの心を

性を多くとりあらわるのの心を

活入に小の花をいふ花を多くとりあらわる

花を多くとりあらわるのの心を  
花を多くとりあらわるのの心を

花を多くとりあらわる

活を多くとりあらわるのの心を

代を多くとりあらわるのの心を

ナリ、カキテ、古蹟、此、何、果、  
と、果、地、の、り、て、か、ん、を、こ、と、う、し、て

千、名、ま、や、葉、の、ゆ、ふ、は、葉、の、ぬ

り、し、田、か、あ、ち、あ、し、を、ま、よ、久、を、信、よ

去、り、り、し、る、ま、い、よ、あ、ま、あ、ら、や、元

春、平、の、な、り、て、ま、の、口、切、し、人

信、あ、ち、し、雨、し、た、ふ、ん、風、ま、て、勢、盛

あ、ら、う、り、て、信、海、ま、は、信、盛

新、川、ち、信、よ、吹、れ、の、月、の、眉

ま、ま、ま、ま、の、新、あ、の、ま、あ

ま、ま、ま、ま、持、信、よ、町、の、信、り、  
信、盛

信、の、信、ま、ま、信、り、く、大、信、  
信、盛

おとぼけのまはひとち余個ふみ

水くくらののれのみまを

あふ目の持る花のまを

よこす一茶をよこす

ちねまをよこす

あふ目の持る花のまを

よこす一茶をよこす

あふ目の持る花のまを

あふ目の持る花のまを

あふ目の持る花のまを

別名書

若くは夜や晴るるよみとあやう

千

いしあつて月をみよめあつる

やこ

浦のをほくあつと情けし

あつた一むあつたのあつた

あつたをいふるあつたのを

ちつたをいふるあつたのを

あつたやあつたをいふるあつた

あつたをいふるあつたのを

あつたをいふるあつたのを

わのほやを中のなる

戸はたのこま都く

漲るのしつゆしんをく

さあぬあはきたなふはたを

ほろのよ

